研究ノート

地理・地形的背景から構想された現代美術作品

── インスタレーション作品《Tracing Suujin》の制作を通して

[1]二　瓶　　晃　[2]井　上　明　彦
[1]同志社女子大学・学芸学部・情報メディア学科・助教（有期）
[2]京都市立芸術大学・美術学部・教授

The installation of “Tracing Suujin”

── Conception and Making of a Site-Specific artwork with Topographical approach

[1] Akira Nihei　[2] Akihiko Inoue
[1] Department of Information and Media, Faculty of Liberal Arts, Doshisha Women’s College of Liberal Arts, Assistant Professor
[2] Faculty of Fine Arts, Kyoto City University of Arts, Professor

1．研究の概要

2015年３月７日（土）から５月10日（日）にかけて元崇仁小学校で行われた「still moving」展に出品したインスタレーション作品《Tracing Suujin》の制作を通して、美術作品の制作プロセスについて考察してみたい。【図①】【図②】

現代美術作品の制作の契機となるものは、その方法論や使われる技術、メディアによって多種多様なものがある。例えば、作者の個人的な経験に基づく内省的な作品や、ポリティカルな内容を含む極めて社会的な作品など作品テーマの設定方法も様々である。特に新しい表現メディアを作者が思い通りに扱えるようになった20世紀末からは、特定の技法やメディアに拘らずに制作された作品も非常に多くなってきた（近年は、プロジェクトやワークショップなどをミックスさせたいわゆる“美術作品”の形態をとらない場合も珍しくはない。）

そのような中で、本研究で取り上げる作品《Tracing Suujin》は「地理」「地形」といった文脈を用いて作品の構想を設計したことに特徴がみられる。（この手法は2014年10月に奈良のギャラリーで展示した井上明彦＋岡田一郎＋田中朝子＋二瓶晃《na ra》の制作で最初に試みられ、今回はその時の手法をベースにしている。）

図①　井上明彦＋二瓶晃《Tracing Suujin》2015（展示した教室を廊下側より望む）

図②　井上明彦＋二瓶晃《Tracing Suujin》2015（教室内）

2．still moving 展について

Tracing Suujin の制作プロセスを考察する上では、まず出展した展覧会「still moving」展の企画との関連性について触れておかなくてはならない。

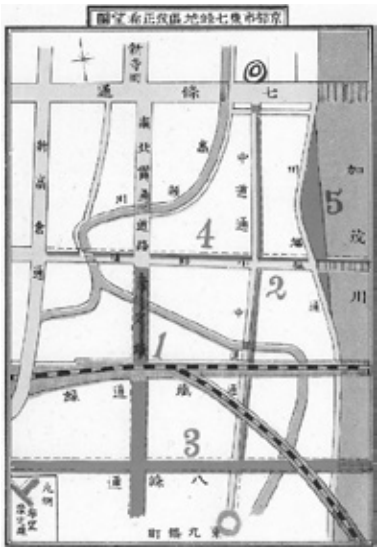
「still moving」展は、京都市立芸術大学の京都市内「崇仁（すうじん）地域」への移転計画をきっかけに構想・実施された展覧会である。この地域は、京都駅から徒歩数分という立地に加え、地域内に流れる高瀬川と鴨川、東山を望む眺望など豊かな自然景観にも恵まれている。しかし、地域の歴史を示す資料館や小学校、史蹟などの地域資源が数多く残る一方、人口の減少や高齢化は急速に進行している。そのような地理的・歴史的背景の中で、京都国際芸術祭2015「パラソフィア」と時期を合わせて開催された展覧会が「still moving」展である。

参加作家は京都市立芸術大学の関係者が多くを占めるが、大学関係者以外の出品者も多数参加した。京都芸大の教員としては、パラソフィアの出品作家である高橋悟教授が両展覧会を関連づける展示をしたのを始めとして、石原友明教授は同氏が教鞭をとる油画専攻のゼミ生と共に参加、小山田徹教授はウィークエンドカフェと名付けた交流の場を崇仁地域の中に立ち上げた。学外からはパラソフィア出品作家のヘフナー／ザックスが地域の空き地を利用した作品を展示、建築家の長坂常氏（スキーマ建築計画）が会場構成として参加し、会場の崇仁小学校を劇的に改装した。また、若手作家として注目されている久門剛史氏など関西を代表する美術家たちが参加している。どの作家も今回の展覧会のために新作を制作しているが、いずれも、“崇仁地域という場所”から作品の構想が始まっているところがこの展覧会の特徴である。

3．地形をトレースするということ

「still moving」展に作品を出品するにあたり、どのようにこの地域に対してアプローチし制作していけばよいのか。そこでまずは、崇仁地域周辺の持つ歴史的・社会的ではない“フィジカル”な、つまり物理的な形成過程とその結果としての現在の状勢をリサーチし、そこからさまざまな表現のリソースとなりうるモチーフを発掘・発見・呈示していく作業を展開していった。その成り立ちから歴史的・社会的次元でのみ語られやすい崇仁地域も、人間と大地・人間と自然の関係という普遍的・根源的視点から眺めるとき、現状とは異なる別な表情を見せる可能性があるのではないだろうか。人間の自然への関わりは、知的表象にもとづいた合理的な（メートル法的）分節／秩序化と、地形や身体に即した経験的（尺貫法的）分節／秩序化という２つの原理かがあると考えられるだろう。たとえば、前者は幾何学的秩序にもとづく計画的な道・建築・都市秩序に、後者はバナキュラーな自生的道・建築に見出すことが可能である。

リサーチや分析の中で我々が最も気になった地形上の特異点（＝人為的な記憶への介入とその痕跡）がある。【図③】崇仁地域を見ると、高瀬川の旧流路とその変更に伴う道と空き地（void）の形成が目を引くが、そこには平安京の持つグリッド構造からの水の流れの“ずれ”と、その“ずれ”への人為的再対応の多重の錯綜が見いだせる。それを象徴するものとして存在するのが、旧流路に沿ってできた道の延長上につくられた「平成の京町屋普及センター（KYOMO）」である。【図④】また、KYOMO の敷地に引



図③　東七条地区改正希望図（1922年）。高瀬川が蛇行している。

図④　現在の崇仁地域の航空写真。（左上が KYOMO、右下が崇仁小学校）KYOMO の東西方向に対する“ずれ”が確認できる。

かれた東西南北から傾いたグリッド、崇仁小学校グラウンドの南を流れる旧流路のままの高瀬川、および両者のあいだに散見される川跡や道の痕跡もあげられる。

数回のフィールドワークを経て、「still moving」展のキーコンセプト「移動（moving）」に呼応するかたちで、水の移動を導く河川（鴨川と高瀬川）の地理的な推移と、人の移動を導く道の形成と変化に注目した作品を制作するに至った。それはstill movingのタイトルどおり、ある地点にたたずみながら、異なる時間・時代に移動する経験への誘いとして機能するのではないだろうか。

導きだされた制作プロセスの一つが「トレース」である。フィールドワークや分析による地形のトレース作業を通して、これらの布置とその通時的変化から特定の線や形態を抽出する。そして、それらを通して、造形表現、音による表現などの手段を用いて作品空間を創りあげていく。地形をトレースすることは単に何かを複写することではなく、そのままでは見えてこない、その場所の現状を再認識する創造的な手段に他ならない。

4．Tracing Suujin

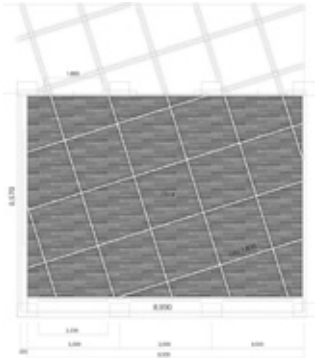
実際の作品はメインの会場である崇仁小学校とは別にKYOMOの2階のフリースペースも利用した。（二ヶ所の会場を共鳴させる狙いがあったが、技術的な不備もあり完全なものではなかった。）各々の会場の作品の構成は下記の通りである。

（1）崇仁小学校教室（南棟3階4年1組）

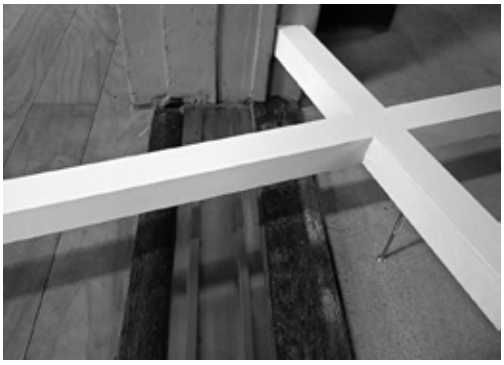
［傾いたグリッド］

会場の教室内に、“傾いた”グリッド（格子）を設置した。【図⑤】グリッドの大きさは1,800mm四方にし、床面からは10cm程度浮遊させている。白色で塗装しているが、下面のみ蛍光ピンクで塗装することにより、うっすらと床面にピンクの筋が見えてくる仕掛けを施した。【図⑥】（ピンク色の線は建設現場で使われる水糸との類似性から土地区画事業を想像する人もいた。）

グリッドは高瀬川の古い流れの方向に沿わせ東西方向に対して17.5度傾いている。それはもう一つの会場である、KYOMOの敷地のグリッドと同じ方向である。教室として使用していた頃からある天井から吊り下げられた蛍光灯も同じく17.5度傾けた。ささやかではあるが傾いた空間構成の演出である。



図⑤　教室内に設置するグリッドの設計図面。廊下までグリッドがつながるように設計してある。



図⑥　グリッドの詳細。下面は蛍光ピンクで塗装してある。

［風景の見えない窓］

教室南側の窓は全て照明用のディフューザーで覆い窓の外の風景は見えないようにした。一ヶ所だけ直径8cmの穴をあけ、そこから校庭にある高瀬川下流の流れが見えるようにした。【図⑦】後述しているが、会場内に転がっているガラス玉と同じ大きさである。

透過された外光は、陰影を目立たなくさせるディフューザーの機能によって、柔らかい均質な光に変換され、音の効果と相まって時間によって明るさや色が刻々と変化する不思議な空間を創出することになった。

図⑦　窓枠を覆うディフューザーに穿けられた穴。覗くと崇仁小学校の校庭が見える。奥に見えるのは新幹線の線路。

［屋外から聞こえる音と聞こえない音］

窓は完全に閉め切り屋外の環境音はほとんど入ってこない空間に仕上げた。（もともと新幹線の線路が見えるほど近いので二重サッシを使うなど防音効果の高い窓枠が取り付けられていた。）そこに窓の外に取り付けたステレオマイクで拾った音声を４つのスピーカーを使ってリアルタイムに教室内で再生した。【図⑧】取り込まれ音声はPC上でリバーブやイコライザなど幾つかのフィルターをリアルタイムにかけることによって、「遠く小さい音」から「近く大きい音」へと徐々に移り変わるようにし、近い音の後には数分の無音の時間帯をつくるようにした。【図⑨】特に、校庭で少年野球が行われている時間帯、子どもたちの声が遠くから聞こえ、近くで聞こえ、そして無くなる、という繰り返しは小学校という場所でもあり、鑑賞者の共感覚的な記憶を甦らせる効果があったように思われる。

［不思議な動きをするガラス玉］

会場内には直径8cmのガラス玉を一つ転がし、会場に訪れた鑑賞者が自由に転がすことができるようにしてある。【図⑩】教室でガラス球をゆっくり転がすと、床面が僅かに傾いているために水平な場所をもとめて、ガラス球が不思議な動きをする。崇仁小学校は、1922年の「全国水平社創立宣言」に関わる呼びかけビラが見つかった場所でもある。上も下もなく、ことよそ、今と昔、光と水が水平に出会う場所、崇仁にはそのような場所があちらこちらに潜んでいることを暗喩している。

左：図⑧　教室内に取りつけられたスピーカー。右下にあるのは教室内の音声を収録するための無指向性のマイク。教室内の音声はもう一つの会場であるKYOMOにライブ送信される。

右：図⑨　隣の教室に設置した、音声を制御するためのPC。

図⑩　ガラス玉。教室内の風景が映りこんでいる。

これらの地形的な背景を持った空間的な“企み”によって、光、水、人、列車など、さまざまな動きの方向が寄り集る空間になった。

（２）平成の京町屋普及センター（KYOMO）

KYOMOの敷地のグリッドは、高瀬川の古い流れの方向に沿っているので、そこに建つ今回会場としたモデルハウスは、かつての高瀬川に面して並んでいるともいえる。【図⑪】（KYOMOのグリッドの傾きは崇仁小学校の会場に設置したグリッドと同様に東西方向に17.5度傾いている。）つまり、崇仁小学校とKYOMOは高瀬川で繋がっているのである。今回の作品ではその繋がりを音声を使ったインスタレーションで再現しようと試みた。

KYOMOは典型的な京町屋の造りをしており、２階のフリースペースは天井の木組みも間近に見ることができる。そこに鍛金して川を模して作られたアルミ板を木組みを逃げるようにくねらせて配置した。【図⑫】アルミは旧高瀬

図⑪　KYOMOの中庭。高瀬川の旧いながれに沿って計画されている。

川の流れをイメージし、かつてその場所に川が流れていたことの標（しるし）である。また、インターネットで両会場をつなぐことにより、崇仁小学校の教室の音を KYOMO 会場内のスピーカーで再生した。線路を行き来する列車、校庭で野球をする少年達、教室を訪れた人々の気配 ── 鑑賞者はアルミの“高瀬川”の下でこれらを聴くことにより、現実にはつながっていない場所同士がつながっていることを認識するのである。

図⑫　天井に配置されたアルミの“高瀬川”

5．土地を巡るワークショップ

会期中には、展示作品と関連したワークショップも開催された。内容は崇仁地域の柳原銀行記念資料館の山内政夫さんの導きで、“失われた水のみちをたどる”フィールドワークである。【図⑬】単なる作品の展示にとどまらず、地域の歴史・文化と直接的につながる企画が可能になるのも、この制作手法の特徴である。当日のガイドをしていただいた山内さんからは「30年以上、部落解放運動や資料集めに奔走してきたが、崇仁を川や道の変化という視点から見て歩くのははじめてで、面白かった」との感想をいただいた。

結果としては美術作品が外からの視点で地域の現状に対する問題点や回答を導き出すということではなく、美術的な思考を使って現実の社会を再認識する一つのきっかけとして機能したのではないだろうか。

図⑬　フィールドワークの様子。高瀬川沿いを調査しているところ。

6．ま と め

今回の制作においては、コラボレーション（共同制作）という制作形態や展覧会の企画内容なども含め、個人での制作とは異なり多くの示唆に富むものになった。特に個人の内面の発露になりがちな美術作品の制作手法から一歩距離をおき、歴史・文化や地理・地形などの外的な要因によって構想される作品は、客観的な視座をもつことが可能になると思われる。（その意味では、制作プロセスや最終的な表現方法を見る限り、純粋美術よりデザインや建築との類似点を想起させる。）現時点では完成度においてまだ実験・研究の域を出ていないところもあるが、今後継続的に同手法の制作を行うことにより、新たな美術作品の在り方を模索していきたい。